

5月定例教育委員会 会議録

日	時	平成30年5月9日(水) 午前9時30分～午前10時10分									
場	所	9階会議室9-2									
出席委員	小林教育長・小宮山職務代理者・原委員・堀委員・市川委員										
出席事務局職員	嶋田教育部長・饗場教育総室長・山本生涯学習室長(生涯学習課長兼任)・星野総務課長・松田学校教育課長・宮川学事課長・照沼教育施設課長・本田甲府商業高等学校事務長・碓井甲府商科専門学校事務長・田中歴史文化財課長・本田図書館長・芦川総務課課長補佐・宮川総務課課長補佐・鷹野総務課課長補佐・保坂総務課主任										
傍聴人	1名										
署名委員											
委員会書記											
・教育委員あいさつ											
・会議録署名委員の指名 小宮山職務代理者											
・4月定例会会議録の承認 原案のとおり承認											
<table style="margin: auto; border: none;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">小林</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">堀</td> <td></td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">小宮山</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">市川</td> <td></td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">原</td> </tr> </table>			小林			堀		小宮山	市川		原
小林											
堀		小宮山									
市川		原									
<p>1 開会</p> <p>小林教育長</p> <p>これより、5月定例教育委員会を開会します。</p> <p>(1) 教育委員あいさつ</p> <p>小宮山職務代理者</p> <p>みなさんおはようございます。連休が続きましたが、みなさんどのように過ごされたのでしょうか。ご家族と過ごされたり、あるいは趣味を一気に成し遂げるようなことをやってみたり、色々な過ごし方をしたと思います。4月もあつという間に過ぎまして、いよいよ今年度は来年の開府500年の前年ということで助走というよりも、もう本走に入るといことで、色々な場面で甲府市をアピールして行って欲しいと思います。この1年もまた大変でございますし、また実際にこの連休が終わった後から実務的にスタートをしていくと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。</p> <p>少し余談ですが、実は4月23、24日は山口県の萩市へ仕事でまいりました。ちょうど萩も「維新150年」といことで、甲府市と同じような看板がかかっていました。また、松下村</p>											

塾にも仕事の時間の合間に寄らせてもらい、それぞれの地域が歴史を辿りながらその節目節目で事業を活性化しようと努めているのだなあと感じました。

今日は、4月から道徳が教科となってきましたので、その関連で今のような硬い話ではなくて、ちょっと軟らかい話をさせていただきたいと思います。

私には小さい頃から落語を聴くという趣味がありまして、特に古典落語というものが好きで、今日は「佐々木政談」という題目で、子どもが主役で出てくる話を、主要なところだけまとめてきましたので、道徳の話を絡めてみなさんにお話しさせていただきます。

本当の落語では笑いが出るのですが、古典落語は元々人情話というところからスタートしてまして、江戸時代や明治時代ではテレビもラジオもございませんでしたから夜は何もすることがないということで、みなさんに集まってもらって人情、いわゆる日本で言う道徳の原点となる、人と人との繋がり、情を重ねる、そういう話なのです。

話しは、江戸の末期でありますけど、佐々木信濃守という非常に歴史上有名な町奉行がおりまして、町民が納得できるような裁判、判決を出していたという奉行さんです。皆さんご存知の名奉行として有名な大岡越前守のように実際に自分が下町へ出て、人々の暮らしを拝見しながらそれに合わせた判決をしており、人情ある判決を出しているという方でした。ある日、田舎侍に身をやつして市中の見回りをしていると、子どもらがお白洲ごっこ、いわゆる判決ごっこをして遊んでいるのが目にとまり、これは面白いと思っていると、数人の子どもが荒縄に縛られており、そこにさっそうと現れた子どもは、こともあろうに佐々木信濃守と名乗っていたのです。この子ども奉行が、「何があったのか。」と問うと、「一から十まで、「つ」がそろっているか。」ということで喧嘩になった裁きをお願いしたいとのことで、この子ども奉行は、「さような些細なことをもって、お上に手数をわずらわすとは不届きである。」と言い渡し、二人を解き放ちました。

そこで他の子どもが子ども奉行に「いや、お奉行さん、そうは言うけども私の質問に答えられるか。」と聞いたところ、この奉行は、「黙れ、奉行の申すことに偽りはない。「つ」は全部揃っておる。中で一つ「つ」を盗んだ者がいる。よく数えてみろ。ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ。この「つ」を十に合わせれば全部揃っておる。」ということでみんなも納得しました。

これは理屈ではなくて、即興の頓智で相手を納得させたということですのでございます。

信濃守は非常に感動して、奉行役の子どもに、町の役人や親を連れて奉行所へ来い、というお知らせを送りました。

その子は桶屋の息子で、四郎吉という十三歳の子どもなのですが、親は、子どもがよくお白州ごっこで遊んでいることを知っていたので、自分たちの首でも飛ぶのではないかと冷や冷やしていましたが、四郎吉は堂々と奉行所に行きました。

すると奉行は上機嫌で出てきて、四郎吉に対して、「これから尋ねることに答えることができるか。」と聞くと四郎吉は、「あなたは上座にいて私は下座にいる。私をそこに上げてもらえれば答えられる。」ということで、奉行は「じゃあ上がれ。」と言い、親はもう真っ青になっているのですが、四郎吉はびよこびよこ上がり、そこで奉行が聞きました。

奉行：「空の星の数を知っているか。」

四郎吉：「それではお奉行様、お白州の砂利の数は知っていますか。」

奉行：「いや、それは知らない。」

四郎吉：「手に取って数えられるものを知らなくて、手が届かないものを数えられるか。」

と、一本勝つのですが、その次に

奉行：「お父さんとお母さんどっちが大切か。」

四郎吉：出された饅頭を二つに割って「お奉行、どちらがおいしいか答えられますか。」

と、いういわゆる頓智ということなのですが、こんな話が二つ三つ続くのですね。

そして最後に

奉行：「後ろの衝立に描かれた仙人の絵が何を話しているか聞いてこい。」

と、言われて、なんと答えたかと言いますと

四郎吉：「お奉行は馬鹿である。と言っています」

奉行：「本当にそんなことを言っているのか」

四郎吉：「ええ、本当に言っています。絵に描いてあるものがものを言うはずがない。と言っています。」。

堂に入った頓智であったため、信濃守は四郎吉に、「今は十三歳だから十五歳になったら奉行所に来て勉強をするように」と言った。

これが佐々木政談の本筋ですが、大人は子どもの能力をしっかりと捉えて見出すということなのです。本当の話はここで終わっているのですが、三遊亭王楽という笑点に出演している好楽の長男は、その話の後に自分で話を創作して付け足しを入れていました。

奉行が四郎吉に「十五歳になったらここに上がって勉強をするように」と言った後に、四郎吉は「お奉行様ありがとうございます。でも私はですね、お父の桶屋を継いで素晴らしい一流の桶屋になります」と言って、これがオチになってくるのですね。要するに、私は江戸時代であったとしても、通常、奉行所に勤めることができれば素晴らしいことなのですが、子どもがお父さんを尊敬し、その仕事を継いで立派な桶屋になりたい、ということで付け足しの話をされたわけです。ここに私は一つ道徳的な話が入っているなと感じました。

そしてもう一つ、少し昔の中国の話なのですが、草原で暮す賢者アーファンティが、油を売って生活をしていたところ、ある時いつも油を買ってくれるよろずやの主人が来て「前回お前さんから買い取った油、1斤（約600グラム）に足りなかったぞ」とアーファンティに聞いたところ、アーファンティは、「おかしいなあ。天秤量りの重りが見あたらなかったの、以前にお主から買った塩一斤を重りにして、それで量って渡したんだが。」ということで話が終わりになります。

これは、いわゆる人間関係の機微、直接的に相手の間違っていること追求するのではなく、遠回しにやる、これが日本の文化であり道徳的な人間関係だという風に私は思いました。

そこで最後に道徳とは、ということで紐解いてみます。インターネット上に掲載されていたものを整理してみますと、「ある社会で人々がそれによって善悪を、邪悪を判断し正しく行為をするための規範の総体を道徳といい、法律とは違い強制力としてではなく、個々の人の内面的原理として働くものをいい、また、宗教と異なって超越者との上下関係ではなく、人間相互の関係を規定するもの。」と、いうように掲載されていました。要するに、お互いの人間関係で相手を思いながら自分の意見を言う、相手の気持ちを思いながら欠点を直接言わず、遠まわしに言うことだと。

実はこのアーファンティの話を小学校1年生から2年生にある先生がしたそうです。その時にパッと笑いが出たのは1割にも満たなかったそうです。これは、日本の道徳的なところが欠けてきているということを示しているのですね。これから先生方が道徳を伝えていくと思いますが、でも、「親は大切にしてください、嘘をついてはいけません。」という単純な話ではなく、先ほど言ったお互いの人間関係が豊かになること、例えば、間違いをしても相手の思いを受けて、直接的に言

わなくて「やっぱり僕が悪いことをしたのだ、よし、直そう。」という自ら反省行動が出る、これがここにいう人間相互の関係だと思えます。そんなことを規定の中で色々教えなければいけないこともあるかと思えますけど、是非とも落語の人間の心、江戸時代、明治と受け継がれてきた、本当の人を思いながらやっぱり人としての道を繋げて行く、こういったことを教えていくことが求められてくるのではないかと思います。また、少し懐古主義になりますけども、これが今度の道徳の中に、日本が培ってきた武士の心や、庶民の人情を含めながら道徳の教育を推進していただいたら素晴らしい日本の道徳が復活し、また、継承されていくのではないかと感じました。ありがとうございました。

(2) 会議録署名委員の指名

小林教育長

会議録の署名委員は、小宮山職務代理者を指名します。

(3) 前回会議録の承認

小林教育長

前回の議事録についてですけれどもすでにお手元に渡っているかと思いますけども、それについて何かご意見ありますでしょうか。

よろしいでしょうか。

では承認いただいたということをお願いします。

【原案どおり決定】

(教育委員会承認)

2 議事

(1) 議題

小林教育長

報告 第7号 平成30年度副読本・ワークブックについて 資料に基づきまして、松田学校教育課長より説明をお願いします。

(松田学校教育課長より資料に沿って説明)

小林教育長

説明が終わりました。これより質疑に入ります。ご意見、ご質問等ありませんか。

原委員

家庭における子どもの貧困等が問題になっておりますが、結構高額ですので、そういった家庭に副読本やワークブックが手に入らないことがないように補助等の制度はあるのでしょうか。

宮川学事課長

学事課において各自治体の制度といたしまして就学援助制度がございます。そちらの方で申請

をしていただいた保護者に対しまして、学校または保護者へ直接そういった援助をする制度がございますので、そちらの方を活用していただいております。

堀委員

では、全員が手にすることができるという認識でよろしいでしょうか。

宮川学事課長

はい。

原委員

はい。ありがとうございました。

小林教育長

他にありますでしょうか。

堀委員

教科書やワークブックとか副読本ではなく、それに関連したことでお聞きしたいのですが、今、小学生では重いランドセルというのがかなり問題になってきていまして、例えば算数のドリルが学期ごとのものと、年間通じてのものでは、年間通じてのものは厚みがあり、その分重さもあるのでランドセルが重たくなる原因になってくるのかなと思いますので、できれば軽減する意味でも、学期ごとの薄いドリルなどを使うというような取り組みが必要ではないかということを考えるのですが、実際、甲府市として小学校のランドセルが重いということに対し、今何か対策が行われているのかお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

松田学校教育課長

まずワーク等が学期ごとになっているかということについてですが、これにつきましては各学校で購入したものによりまして三冊の分冊になっているものもありますし、資料集のように一年間、あるいは中学三年間使うものもあります。

ランドセルの重さについてですが、例えば先ほどお話ししました千代田小学校の朝学習のドリルのようにむしろ学校へ置いておいて学校の授業の中で活用するというものもありますし、家庭学習で使うので持ち帰るというものもありますけれども、各学校で教員が子どもの体力の発達段階に応じて持ち帰るものを指導しているところではありますが、また改めてこれにつきましては、特に低学年のところについては薄くしていきたいと思います。

堀委員

はい、よろしく申し上げます。

市川委員

実際に確かに重くなっています。一つの原因として教科書が大きくなっていることが挙げられます。昔はB5版という形だった教科書が今は大体A4版になっていて、要するに一回り大きく

なっています。また、物によってはA4版の変形ということで横長になっていたり、紙の質がちょっと良くなって厚い紙が使ってあったり、あるいは図鑑とかそういったものがたくさんあると、どうしても教科書自体の重さが増えてしまうということもありますので、低学年の1年生とかのうちは通常、教科書はほとんど学校に置いておいて、必要な物だけ持ち帰るという対応をしている学校が多いと思います。高学年になるとどうしても宿題がたくさん出るので重くなる傾向があるのかなあと現職のときに感じておりました。以上です。

【原案どおり確認】

(教育委員会決定)

(2) 報告

小林教育長

報告 第8号 平成30年度教育委員会総合教育視察について
資料に基づきまして、松田学校課長より説明をお願いします。

(松田学校教育課長より資料に沿って説明)

小林教育長

説明が終わりました。ご意見、ご質問等ありませんか。

原委員

質問ではなくお願いなのですが、はじめに学校の情報を簡単に結構ですので資料にさせていただけると大変ありがたいので、お願いできますでしょうか。

松田学校教育課長

はい。

小林教育長

では用意をお願いします。

他に何かありますかでしょうか。

では例年のことになりますけども、是非よろしくをお願いします。

松田課長ありがとうございました。

他に何かございますでしょうか。

よろしいですか。

それでは原案のとおり確認いたしました。

【原案どおり確認】

(教育委員会確認)

3 閉会

小林教育長

それではこれもちまして、5月定例教育委員会を閉会します。